

總統府（旧台湾總督府）周辺の歴史建築

片倉 佳史

日本統治時代に台湾總督府として建てられた現在の總統府。その周辺には現在もいくつかの歴史建築が残されている。その代表格とされるのが前号で紹介した台湾總督官邸（現台北賓館）だが、今回はそれ以外の建築物について紹介してみたい。

司法大廈—台湾における司法の最高機関

ここは旧台湾總督府の南側に位置する建物である。外壁は浅緑色をしており、少々地味な印象を禁じ得ない。しかし、その分、重厚な雰囲気をもとっている。現在は「司法大廈」と呼ばれ、台湾における司法のシンボルとして君臨する建物となっている。

この建物は終戦まで台北高等法院を名乗っていた。内部には検察局や地方法院も入っており、文字通り、台湾全体を管轄する司法機関であった。

この場所は、領台間もない頃にはすでに司法機関が置かれることが決まっていた。文献によれば、總督府庁舎の建設予定地が決定した1899（明治32）年には、ここが高等法院の設置場所と定められている。

現在の庁舎の造営が始まったのは1929（昭和4）年4月である。そして、竣工は1934（昭和9）年3月。敷地の総面積は4711坪となっており、總督府には及ばないものの、それなりの規模を誇る建築物である。設計は台湾總督府官房營繕課が担当している。造営に際しては、のべ23万8千人という人員が動員されたという。工期がわずか5年というのも特筆されるべき点であろう。

この建物の外壁を覆っているのはスクラッチタイルと呼ばれるものである。表面に意図的に縦型の傷を付け、これを模様としている。タイルの表面は薄い緑色をしている。これは戦時体制下にだけ見られた色合いで、「国防色」と呼ばれていた（ほ

かに黄土色のものもある）。

スクラッチタイルはコンクリートが資材として多用されるようになった時代に生まれている。台



司法大廈全景。建物は台湾總督府と同様、真東を向いて建っている。これは本国遙拝を意識したものと言われている。



館内の様子。会議室など、往年の姿を保っている部屋が多い。



館内には大理石をはじめとする石材が多く用いられている。

湾では昭和期に多く採用されている。多くの場合、単調な印象になりがちなモダニズム建築でスクラッチタイルはよく用いられた。浅緑色のタイルは朝陽を浴びて淡く輝き、独特の味わいを醸し出している。

帝冠様式としても知られていた

この建物は全体としては帝冠様式を踏襲している。これは昭和時代に入ってから終戦までの間にだけ見られた特殊な建築様式である。正式には「帝国冠帽様式」と呼ばれている。重厚感をまとい、どっしりとした安定感が特色とされるスタイルである。

帝冠様式の特徴を挙げるなら、それは鉄筋コンクリート構造の建物に和風、もしくは古代中国風の屋根を被せている点に尽きる。つまり、母体としては建築的な進化を経ているものの、あえて古風な東洋的雰囲気を感じ込んでいるのである。

外観としては箱形の建築母体に和風の屋根を冠していることが多いが、ここの場合、重厚な壁面が強調されたロマネスク調の建物で、それだけでも独自の風格と言える。典型的な帝冠様式とはいえないが、やはり特筆すべきものと言えるだろう。

昭和時代に生まれ、終戦と同時に消えた建築様式である。近代建築の整合性と懐古趣味を融合さ

せたものとされるほか、西洋建築に東洋の美意識を注入したデザインとも言われる。もちろん、戦時に吹き荒れた皇民化運動とも無縁ではない。日本古来の雰囲気強調することで、植民地を含む日本国民が一丸となって戦争へ立ち向かうことを鼓舞していた。そのためか、現在の台湾では「興亜様式」と表現されることが多い。

帝冠様式は戦時体制下の日本特有のものである。台湾でも昭和10年代に多く見られるようになった。屋根の部分に付加された東洋のテイストは、大日本帝国の威信を強調していたのは言うまでもあるまい。建築デザインにも国威発揚の意図が盛り込まれていたところに、当時の世相がかいま見られる。

現在、台湾では旧高雄駅（現高雄願景館）、旧高雄市役所（現高雄市立歴史博物館）などを例にいくつかを見ることができる。日本国内では旧軍人会館（現・九段会館）や旧東京皇室博物館（現・東京国立博物館）や愛知県庁舎、名古屋市役所、神奈川県庁舎、静岡県庁舎などが知られている。

なお、この建物に関しては大きな改修が施されており、中央塔の部分も雰囲気が変わっている。これによって帝冠様式らしさは薄れている。

中央塔とシンメトリー

日本統治時代に建てられた官庁建築の多くは建物中央に高塔を抱いていた。これは威厳を強調する狙いがあり、台湾をはじめ、朝鮮などでも数多く見られた。この塔によって左右は完全な対称となっていることが多い。台湾総督府のところでも触れたように、塔の高さは非常に重視されていた。

この建物はもともと三階建てであった。古写真と現在の姿を比較すると、若干の違和感を免れないのは、この増築によるところが多い。1965年、屋上部分に増築が施され、本来の雰囲気は損なわれてしまった。その後、1977年にも改修工事を受けている。



中央塔の屋根の部分は改修を経て大きく雰囲気が変わっている。

この増築によって塔の高さは目立たなくなりました。壁面に関しては改築後も統一感は保たれたが、建築美という観点からは、増築によって失われたものは大きい。

現在、この建物は国家が指定する文化財になっている。歴史的建造物という名目で保存されることが決まったが、国定古蹟というのは中華民国政府が認定した歴史建築の中では最高位にある。竣工以来、台湾の歴史を見続けてきた老建築は現在、台湾の歩みを物語る歴史遺産として扱われている。

台湾銀行—台湾経済に君臨した銀行建築

この建物は旧台湾総督府の北側に位置する大型建築である。日本統治時代の台湾銀行本店で、組織は全く別個のものだが、現在も台湾銀行を名乗っており、中央銀行として機能している。

この建物は連載第9回で取り上げた日本勧業銀行台北支店（現土地銀行）とともに、台湾を代表する銀行建築として知られている。竣工は1937（昭和12）年6月末日。請負施工は大倉土木株式会社で、起工日は1934（昭和9）年8月4日。竣工から約2ヶ月が過ぎた9月13日から営業が始まっている。設計を担ったのは勧業銀行建築課長を務めた西村好時の建築事務所であった。

建物の前に立ってみると、重厚な雰囲気に圧倒

されてしまう。壁面は石組みを模しており、堅牢さが強調されている。玄関なども荘重な雰囲気である。様式としてはネオ・ルネサンスの流れにあり、建物正面に連なる八本の列柱（オーダー）が強烈な存在感を誇っている。

古今東西を問わず、銀行は何よりも信用と安定が重視される。それは戦前の台湾でも同様だった。現在、台湾では戦前に建てられた銀行建築がいくつか残っている。それらを訪ねてみると、ほとんどが大列柱を特色とした建物だ。これは列柱を用いて高さを強調し、安定感と威厳を表現しているのである。

外壁が石組み風になっているのも銀行建築ならではのものと言えよう。石を用いることで堅牢な印象を与えていくのは旧日本勧業銀行台北支店（現土地銀行）にも共通している。建物全体が厳つい雰囲気に包まれているように見えるのはそのためである。ここはそんな銀行建築の代表例ともいべき存在だ。

この建物に据え付けられたギリシャ風の列柱にも注目したい。上部に目を向けると、コリント式と呼ばれる装飾が施されている。これは柱頭にアカンサス（葉アザミ）と渦巻き模様を組み合わせ、冠のような形をしている。古代ギリシャでは建築意匠のモチーフとして多用された。



台湾銀行は台湾経済に君臨したばかりでなく、日本の中国大陸進出にも大きく関わっていた。そんな背景もあって、この銀行は重要な地位を与えられていた。



台湾銀行総行全景。なお、国家イベントの際には、ライトアップも施され、總統府との二重奏というべき美しい眺めが楽しめる。現在、ここは台北市から古蹟の指定を受けている。

なお、余談ながら、コリント式のオーダーは実際のギリシャでは作例が多いとは言えず、様式としても未完のまま、ローマ人に伝えられたとされている。

銀行建築の館内をたどる

館内に目を向けてみると、まずは見事なまでの吹き抜けのホールに圧倒される。この建物は3階建てで、この吹き抜けもかなりの高さがある。一階には「客溜」と称される接客スペースがあり、応接室が9部屋あった。玄関は東に向いた正面玄関のほか、通用門として南北にそれぞれ出口が設けられ、西側にも出口があった。

奥まった場所には庶務課があった。こちらは大口顧客の窓口となっており、竣工時の図面には「商人溜」という表記が見える。正面玄関から見て最も奥まった場所には手形交換室が設けられていた。

なお、この建物は竣工時から禁煙となっていた。喫煙室は業務スペースの後方にあり、最も奥まった場所に設けられていた。

二階には頭取室や重役室のほか、タイピスト室や支店課、秘書課、重役用の食堂などがあり、東面はベランダとなっていた。三階には計算課や調査課、庶務課、検査課、発行課、監査役室などが

あり、職員用の食堂があった。

なお、この建物には地下もあり、こちらは機械室を中心に書庫や製本室のほか、倉庫がいくつかあった。また、竣工時から三台のエレベーターを備えていたことでも知られていた。さらに、銀行らしく、廃棄紙幣の焼却炉などもあったという。

台湾産の資材が多用された時代

私は縁あって、この建物が竣工した際に発行された記念絵はがきを見たことがある。そこに記された解説文に興味深い記載があった。この建物の用材は台湾東部産の花崗岩が使用されたというのだ。

昭和時代に入り、すでに安定期を迎えていた台湾では、建築資材にも台湾産のものが用いられるようになっていた。治安が安定し、各地の産業が発達したばかりでなく、交通網の整備も進み、それまでは辺境と呼ばれていた台湾東部も、台北を中心とする流通システムに組み込まれるようになっていたのである。

こういった状況は同時期に造営された建造物にも散見できる。例えば、台北郵便局や日本勧業銀行台北支店、先代の台北駅舎、台北公会堂（現中山堂）などは例外なく、台湾産、特に台湾東部産の資材が多用されている。特に石材については良質なものが産出されたこともあり、広く採用されている。

また、火災対策も万全が期されていた。この建物に限らず、昭和時代に入ってから建てられた建造物では館内の随所に火災探知機が設けられている。この建物については、戦前の放水口も残っている。正面玄関脇の外壁に埋め込まれており、そこには今も、「KENSETSUKOUGYOSHA」（「建設工業社」）という企業名が刻まれている。ほとんど知られていないが、注目してみたい遺構だ。



外壁に埋め込まれた放水口。火災対策も万全が期されていた。放水口は戦前のものが今も残っている。「KENSETSUKOUGYOSHA」の文字が見える。

旧帝国生命台北支店

台湾銀行の後方に位置するこの建物にも触れておきたい。際立った装飾が施されているわけではなく、目立つ存在ではないが、地味な風格の中に、どこことなく優雅さが漂う建物である。

この建物は帝国生命台北支店として使用されていた。残念ながら、詳細な資料は残っていないが、この場所に帝国生命が事務所を構えたのは大正時代を迎える前と言われている。先代は尖塔を抱いた美しい木造建築だったが、この建物は台湾特有ともいべき「蟻害」に遭って建て直されることとなった。

この建物は1930年代の台湾によく見られる機能性を重視した造りである。外観はシンプルに見えるが、細部に眼を向けてみると、精緻な装飾が施されている。

玄関部などは石組みを模しており、安定感が強調されている。なお、この石材も台湾銀行本店と同様、台湾東部で切り出されたものが用いられたという。

終戦を迎え、日本人が引き揚げると同時に、帝国生命はこの建物を放棄し、国民党政府がそれを接收した。現在は台湾銀行がこの建物の所有者と



旧帝国生命台北支店外観。現在は台湾銀行が管理者となっている。建物のちょうど中ほどまで樹木の緑に覆われている。

なっている。なお、帝国生命は戦後、国内で朝日生命保険相互株式会社となって現在に至っている。

正副総統文物館（旧交通部）

旧台湾総督府交通局通信部。ここは総統府の後方に位置する大型建築である。戦後は長らく交通部が使用してきたが、現在、その機能は新庁舎に移っており、中華民国総統と副総統にまつわる文物館として使用されている。

建物の竣工は1925（大正14）年。設計者は台湾総督府技師・森山松之助であった。終戦までの住所は台北市書院町2丁目1番地。建物の正面に立ってみると、中央に設けられた半円状の入口部と、その上方に並んだ12本の列柱が印象的だ。

入口部は庁舎としての規模を考えると小さいように思える。しかし、石組みのアーチは堅固な印象を与えている。その上方、つまり建物の正面中央を見上げると、採光を意識した出窓構造となっているのがわかる。

この建物は元来、3階建てだった。しかし、戦後になって屋上に最上階が増築されている。この増築によって、頭上に大きな荷物を置かれたような形となってしまい、不格好な姿になっている。これは、旧台北高等法院（現司法大厦）と似たケースである。



全景。時期的には旧台湾総督府に少し後れて完成した建物である。戦後は中華民国交通部の庁舎として使用されてきた。

この建物は長らく中華民国交通部の庁舎として使用されていた。終戦までは台湾総督府交通局通信部を名乗っていたが、両者の機能は酷似している。ともに各種交通機関の管理から電信・電話、郵便と幅広い部署を管轄している。当然ながら、多くの職員が勤務し、この建物に出入りしているのだが、どういうわけか、いつもひっそりとした印象だった。また、個性的な外観を誇っているにもかかわらず、歴史建築として話題となることもなく、目立たない存在だった。

現在、建物は国史館（国家の正史を司る機関）に移管されている。博物館としては一般公開されており、場所もわかりやすいので、散策の途中に立ち寄ってみたい。

知られざる歴史建築—旧台北陸軍偕行社

旧台湾総督府の裏手には日本統治時代の偕行社が残っている。偕行社とは陸軍によって設立された集会場である。ここは清国時代、台北最大の学問所「登瀛書院」のあった場所だが、1899（明治32）年に官民倶楽部である「淡水館」に変わった。その後、陸軍偕行社が設けられ、終戦を迎えた。

敷地面積は12240平方メートルと広い。建物がそれほど大きくない分、敷地内には常緑性の樹木が繁茂している。竣工は1913（大正2）年12月20日。落成式には第5代台湾総督の佐久間左馬太が

臨席しているが、実際に使用されたのは翌々年からとされている。

終戦後は中華民国国防部が管理者となった。実際は中華婦女反共抗俄聯合會という組織が使用していた。後にこの団体は中華民国婦女聯合會と改



穏やかな色合いの壁面が印象的な建築物である。一階、二階とも回廊が設けられ、コロニアル風建築の雰囲気を感じさせている。



現在、この建物は使用されていないが、二階の回廊部に宋美齡の遺訓が今も残されている。



回廊部分の様子。2012年3月現在、この建物は使用されていないが、一般公開が模索されている。

名し、この建物の管理者であり続けた。そして、蒋介石夫人の宋美齡の下、様々な活動が行なわれた。

1998年9月1日には台北市が指定する古蹟となった。婦女聯合會は別の場所に移り、この建物は放置されることになった。ここを宋美齡記念館とするアイデアも出されたが、現在は台北地方法院が管理者となっている。

ここは日頃はほとんど公開されていない神秘的空間だが、行政院新聞局の手配で撮影をさせてもらったことがある。建物は四周が回廊のようになっており、一階、二階ともにベランダが設けられている。欧米列強がアジアで好んで建てたコロニアル風のスタイルである。

建物は南を向いており、南国の強い日差しを浴びている。赤煉瓦と石材を混用した造りで、当時、軍の関連施設に多く見られた建築スタイルだった。台北においては比較的早期に造営された洋館建築としても注目されている。

旧台湾電力株式會社社長官邸

ここは旧台湾電力株式會社の社長宅として建てられた邸宅である。現在も同社を引き継いだ台湾電力公司の管理下にある。白亜の壁面が美しい洋館建築だが、使用される機会は限られ、一般公開もされていない。まさに閉ざされた空間である。

建物の竣工は1909(明治42)年前後と推定されている。設計と造営を担当したのは台湾総督府土木部だった。その後、1919(大正8)年7月31日に台湾電力株式會社が設立され、建物は移管された。当時は洋館というものの自体が珍しく、しかもここは二階建てということで注目を集めた。

広い庭園から建物を眺めると、ベランダなどにもこだわりが感じられ、柱部にはギリシャ風の装飾が施されている。派手さはないが、全体としてはコロニアル建築の雰囲気が感じられる。

屋根を見上げてみると、日本瓦が施されている。



広い庭園を従えた洋館建築である。緑の中に浮かぶ様子が印象的な眺めとなっている。現在は台北市が指定する古蹟になっている。



建物正面。玄関の部分は東洋的なセンスも加味された独自のスタイルとなっている。建物の四面すべてが異なっているという凝ったデザインである。

日本統治時代の高級官舎は和洋折衷のスタイルが大半を占め、こういった黒瓦はよく見かける。

戦後を迎えると、建物は国民党政府の接収を受け、中央招待所と改められた。後には台湾省主席官邸になった時期もある。1998年5月4日には台北市から古蹟の指定を受け、保存対象となった。一般公開されることはないが、接待などでは使用されることがあるようで、管理はそれなりに行き届いている。

台北電信電話局

ここは日本統治時代の台北電話交換局で、總統府の裏手に位置している。一見したかぎりでは、ごく普通のオフィスビルのように見え、古さはあまり感じない。現在は中華電信の營業所として使

用されている。

現在の地図に従えば、博愛路と貴陽街の交差点に位置している。一帯は終戦まで書院町と呼ばれていたエリアである。この建物には圧倒されるような威厳があるわけではなく、壮麗なたたずまいを誇っているわけでもない。しかし、しばらく立ち止まってこの建物を眺めていると、徐々にその美しさが際立ってくる。

この建物が使用され始めたのは1937（昭和12）年7月2日。電報と電話を扱う交換局として設けられた。設計を担当したのは鈴置良一。当時、台湾の建築界はモダニズムの潮流を迎えており、この建物もその影響を受けている。

建物はとてもシンプルなデザインで、水平に伸びた庇が湾曲する建物側面に沿っているのが唯一の模様となっている。しかし、緩やかな楕円を描いた輪郭には表現派の雰囲気も感じられて興味深い。また、堅固な鉄筋コンクリート造りで地震対策が施されていることも特色に挙げられよう。

ここを訪れるなら、ぜひとも夕刻を狙いたい。黄昏時を迎え、夕陽が南国の空をゆっくりと染めていくにつれ、この建物も刻一刻と表情を変えていく。すっきりとしたデザインに特有の精悍さをこの建物は見せてくれる。

台北第一高等女学校

ここは台湾を代表する名門女子高校である。現在は台北市立第一高級女子中学を名乗っている。その歴史は1904（明治37）年にまで遡る。前身となるのは日本語教員を養成するために設けられた国語学校で、その第三付属学校という名が付けられていた。

この学校は戦前から、島内きっての優秀な生徒が集まる学校としてその名を馳せてきた。当初は台北州立第一高等女学校を名乗っていたが、1921（大正10）年に台北第一高等女学校と改名されている。

清国統治時代、この場所には孔子廟があったと

いう。これは文廟と呼ばれ、それを取り壊した場所にこの学校が設けられた。日本統治時代に設けられた学校の中でも指折りの歴史を誇る教育機関である。

この学校は台湾を代表する名門校であったことは事実だが、その実態は日本人子弟のみが入学できる学校だったことも触れておくべきであろう。つまり、一部の例外を除くと、台湾にありながらも、台湾人の入学は認められなかったのである。

現在も日本統治時代の卒業生による同窓会は続いており、私も何度か取材をさせてもらったが、そのたびに台湾人卒業生の少なさに驚く。例えば、台北在住の郷土史研究家黄天横氏の婦人はこの学校の数少ない台湾人卒業生だが、当時、彼女のクラスに在籍していた台湾人の同窓生はわずか1名だったという。

台湾における教育機会の差別というものは植民地統治の実態を語る上でよく話題となるが、この学校はそういった状況が徹底していた。同様のことは台北第二高等女学校（終戦後に廃校処分）に遭い、現在、建物は立法院として使用されている）



現在、この学校の生徒数は昼夜を合わせて4500名にもおよんでいる。教職員数も300名を数え、文字通りのマンモス校である。

にも言えた。台湾人子弟が進学できる女学校は台北第三高等女学校（現中山女子高級中学）か、私立学校にほぼ限られていた。

モダニズムを踏襲した校舎

現在の校舎は1932（昭和7）年に竣工し、翌年から使用されている。鉄筋コンクリート構造の堅固な建物である。当時、すでに赤煉瓦を用いた建築物は減っており、ここもモダニズムを踏襲したデザインとなっている。水平曲線をデザインとして用い、整然とした雰囲気漂わせている。外壁に装飾らしいものはほとんどなく、それがかえって美しさを際立たせている。

この建物は地震に対して万全の策が施されていたという。1923（大正12）年に首都圏を襲った関東大震災を経て、日本と同様、台湾の建築基準も厳しくなったことはこれまでも述べた。また、地震が建築技術の進化を促したことも事実である。当時の建築家たちは、本土で地震の猛威を再認識し、同じく地震多発地帯にある台湾でも、それを意識した設計に邁進したのである。

戦後になって日本人が台湾を去ると、この学校は国民党政府の管理下に入り、名も現在のものに改められた。この校舎には「光復樓」という名が付けられた。「光復」とは、侵略者によって隠されていた光を取り戻したという意味であり、台湾は元来自国の領土であり、日本が放棄した領有権を継承するのは自分たちであると主張する中華民国政府が多用してきた表現である。

もともとは終戦直後に盛んに用いられていた言葉だったが、中華民国国民党政府が台湾に君臨することを正当化するべく、戦後も長らく目にする表現であった。

構内に残る校訓碑

私が最初にこの学校を訪れたのは1997年のこ

とだった。その際、構内の片隅に小さな石碑に巡りあうことができた。

その石碑は茂みの中に、静かに立っていた。そこに刻み込まれた文字を追ってみると、

清く

強く

淑かに

と書かれてあった。言うまでもなく、この学校の戦前の校訓である。戦前の校歌の中にもこの言葉は入ってくる校歌についても触れておこう。

台北第一高等女学校校歌

（作詞：清水儀六、作曲：張福興）

1

すめら御国の 南（みんなみ）の ここ蓬萊が うまし島
島の民草 栄えゆく 基つちかう おみなごの
光榮ある教 布かんとて とくひらかれし 学び舎は
これぞ我等が 母校なる

2

あした夕べに 劍潭（けんたん）の かしこき宮居 仰ぎつつ
月影清き 淡水や 旭に匂う 大屯（だいとん）の
姿をしのび たゆみなく 心をみがき 身をねりつ
集うや九百の 姉妹（あねいもと）

3

めぐみ豊けき 常夏の 島に繁れる 草は木は
常磐のみどり 蔭深く 永劫の生命の しるしなる
我等がその 撫子も 正しく強く しとやかに
変わらん操 養えや

現在、この石碑は校内史蹟の扱いを受けており、守られている。後に訪れた際には、傍らに解説板が設けられていた。周囲には植え込みなどもある。解説板によれば、この石碑は1934（昭和9）年度の卒業生によって贈られたものであるという。

この昭和9年という年は、この学校の前身である国語伝習所第三付属学校が開設されて、ちょうど30年を迎えた年でもある。石碑はそれを記念

することも兼ねて建てられたようだ。

石碑はもともとは校庭にあったというが、戦後の混乱期、そして、校舎増築の際に倒されて、放置されたという。一説には土の中に埋められていたとも言われ、そのために誰もこの石碑が残っていることを知らなかったという。それが再び陽の目を見たのは、1995年のことであった。

現在、台湾では「民主化」の進行に伴い、言論の自由が保証されている。それと同時に、台湾の地を過ぎていった歴史についての自由な論議も活発になっている。戦後、国民党政府によって行なわれていた言論弾圧と排日政策も終わり、あるがままの歴史を直視しようという動きが現在の台湾では定着している。

この石碑は建てられてからわずか10年で終戦を迎え、その後は長らく深い眠りにっていた。半世紀という時空を経て、石碑は日の目を見たが、変わりきった台北の町並み、そして「台湾」の姿を見て、何を思っているのだろうか。



半世紀の眠りから覚めた石碑。そこには、戦前の校訓が刻み込まれていた。現在は史跡の扱いを受け、守られている。



校門の脇には日本統治時代に設けられた木造の守衛所が残っている。現在は休憩スペースとなっている。

片倉佳史（かたくら よしふみ）

1969年生まれ。早稲田大学教育学部卒業。台湾に残る日本統治時代の遺構を探し歩き、記録している。これまでに手がけた旅行ガイドブックはのべ30冊を数える。そのほか、地理・歴史、原住民族の風俗・文化、グルメなどのジャンルで執筆と撮影を続け、台湾の社会事情や旅行情報などをテーマに講演活動も行なっている。著書に『台湾に生きている日本』（祥伝社）、『観光コースでない台湾』（高文研）、『台湾・鉄道の旅』（JTBキャンブックス）など。台湾でも『台湾風景印－台湾・駅スタンプと風景印の旅』（玉山社）などの著作がある。最新刊は『台湾に残る日本鉄道遺産』（交通新聞社）。

ウェブサイト台湾特捜百貨店 <http://katakura.net/>